■終業式のお話

「せんせい、さよおなら。みなさん、さよおなら！」
「はーい、さようならー。みんな、よいお年をー」
よいおとしをー！　めりーくりすまーす！　せんせー、僕ハワイ行くんだよー。私ねー、スキー行くの！
号令が終わると共にきゃわきゃわと生徒たちは騒ぎだし、ランドセルに体操着が入らないと奮闘し、机の奥から食べかけの食パンを発掘して悲鳴を上げている。なんとか全員を教室から送り出すのに、三十分以上掛かった。
二学期終業式、これにて終了。坂田銀八は今年最後の大仕事を終えた満足感に、ふうと息をつく。
区立銀魂小学校。坂田銀八はその三年Z組の担任である。
この地域一帯は再開発により高層マンションがいくつも建設された今時ありがちな下町であり、この小学校はそのマンションへの入居に伴う急速な児童数の増加により遂にクラスが『Z』まで到達してしまったという、ちょっとありがちの度を越した学校である。
急ピッチで建設された真新しい校舎。銀八はここに赴任してまだ三年目だ。ここに来るまでは教諭免許は持っていたものの、どの学校にも就職できず、致し方なくフリーターをやっていた。どれほど教育への熱意に燃えようとも、少子化には抗えない。
そして三年前、この銀魂小学校は付近の児童を迎え入れるため規模拡大を行い、銀八はなんとかそれに紛れ込んだ。
正直、不安はあった。教育実習からもう五年も経っている。昨今の児童を取り巻く地域事情や犯

罪、そしてうわさの学級崩壊。憧れの『先生』になれたはいいものの、こなせるかどうか。
その不安は、半分外れ、半分当たった。幸いにも立ち並ぶ高層マンションはそこそこ高級な部類だったので、家庭環境が整った児童が多く、授業中に暴れだすような子供も少なければ、それを叱ったからと言って逆ギレしてくるモンスターペアレントも少ない。そして、町には子供を地域全体で育てるという古き良き人情が残っており、児童が犯罪に巻き込まれることも少なかった。実に安定した平穏な学校である。そこに不安はない。
不安があるのは銀八自身にだ。銀八自身が、子供を犯罪に巻き込み、学級を崩壊させかねない、重大な問題を抱えているのだ。
「……せんせぇ」
細く高い、子供特有の柔らかい声が耳をくすぐり、銀八はぞくりと背筋を震わせた。
いた。やっぱり残ってた。銀八はそろそろと首を回し、教室の前のドアに顔を向ける。
一人の男子生徒が顔を半分ドアから覗かせていた。
「……あれ？　まだ帰ってなかったのかな、ヅラくん？」
「ヅラじゃありません、桂です。それに……二人っきりの時は小太郎って呼ぶ約束じゃないですか」
「してないよ！　そんな約束してないよ！　勝手に約束しないでよ！」
この生徒が、この桂小太郎という男子生徒が問題なのだ。
あろうことか、銀八は彼から猛烈なラブアタックを受けている。
ラブレターももらったし、誕生日プレゼントももらったし、体育祭のフォークダンスも申し込まれた。
何故、小学三年男子が、担任の男性教諭に恋心を抱くのか。それは分からない。この年頃のお子

様が考えることは、さっぱり分からない。

問題は、彼がそこらの女子では太刀打ちできないほどの美少女顔だということ。そして、半端なU－15アイドルが裸足で逃げ出すくらいのエロさを持つことである。正直、存在が児ポ法ギリギリだと思う。

その歩く性犯罪誘発が、とことこと教壇に走りよってきた。くるりと円らな子鹿のような瞳で銀八を見上げる。

「先生、もうクリスマスですね」

「うん、そうだね。サンタさんには何か頼んだの？」

「……やだ、先生、サンタを信じてるんですか？」

「信じてねえよ！　ヅラくんが信じてた場合を踏まえて気を使ってんだよ！　時々嫌なこと言うよね、ヅラくん！」

「何度言ってもヅラってよぶ先生ほどじゃないと思います。サンタさんにはもうお手紙を書いたのでだいじょうぶです」

「結局、信じてんのか信じてないのか、どっちだよ……」

「子どもはふくざつなんですよ」

何を疲れた表情でため息ついてんだ、この小学生。

「問だいはサンタさんではないんです、先生。クリスマスといえばもっとだいじなことがあるのです」

「あ、ケーキ？　先生ねー、わざわざお取り寄せしておいしいのを三つも揃えたのよ。今日届くんだぜ、もー楽しみで楽しみで……」

「ということは、先生は今年も女の人とはいっしょにすごさないんですね」
「……うるさいよ。今年もってなんだよ、ヅラくんは去年の俺の何を知ってるのよ、二年の時は担任じゃないじゃん」
「よかったです。これでえんりょなく、先生のうちにおとまりにいけます」
「はー、然様ですか……って、えええええええ?」
いきなり何を言い出したのか。当の小学生は、けろりとしたいつもの無表情で銀八を見上げている。
「お泊りって……なにそれ⁉　聞いてないんだけど⁉」
「いま言いました。くわしいことはこれに」
ずいと連絡帳を差し出される。なんとなーくいやな予感がしつつ、十二月二十四日の部分を開く。
桂くんの母親であるヅラ子さん（書いて字の通りの淫乱人妻）の流麗な手跡が現れた。
『坂田先生へ。
いつも小太郎がお世話になっております。
さて、本来であれば毎年年末年始は親子水入らずで過ごすのですが、今年は夫が長期の休みを取ることができまして、久方ぶりに夫婦水入らずで過ごすことと相なりました。
南の島にて夫と二人、生まれたままの姿で存分に絡み合い、小太郎の弟か妹を仕込んできたいと思っております。
私ももうよい齢でございますから、露出の激しい水着は恥ずかしいのですが、齢を経て柔らかくなった肌に食い込むのがよいと夫が申しますので、大変布地の少ないビキニを購入致しました。着てみたところ、私の大きなお尻がほとんど露となってしまい、そのみっともない格好に羞恥する仕

草が夫の中のケダモノを刺激したのか、彼の指がわずかな布地の下へ潜り込『

「なんでヅラ子さんは、毎回、連絡帳に官能小説を書いてくるかな……」

「わかりやすいでしょう?」

「お陰で先生、君んちのお父さんがナース好きのスパンキング好きってことまで知ってんだけど。家庭と学校の連携取れ過ぎだと思うんだけど」

さらさらっとエロシーンをすっ飛ばす。真面目に読むと即下半身に血流が集まってくるのでやばいのだ。あとでコピーしていつも通りファイリングしとこう。

『……**お陰様で、年末の忙しい時期だというのに腰も立たぬほど、夫に愛されてしまいました。**』

「ヤリ過ぎ!　なんで旅行行くのに、その前哨戦からこんな激しいの!」

『**さて、つきましては両親不在の間の小太郎なのですが、先生のお宅にお邪魔させていただけるということで、ご快諾をいただき本人も大変喜んでおります。生活費や着替えについては持参させますので、冬休み一杯、よろしくお願い致します。それでは**』

「……え?」

聞いてない。そんな話は聞いてない。ゆっくり桂くんの顔をみる。

「うそついちゃいました☆」

てへっ☆

「嘘ついちゃいましたじゃねええええ!　聞いてないよ!　つーか、俺が旅行とか彼女と過ごすとか言ってたら、どうする気だったの⁉」

「そのばあいは、出会い系サイトみたいなところで、とめてくれる人をさがそうかなあって」

「よし、先生、未成年の携帯所持規制賛成に一票投じてこよう。つか、何⁉　ヅラくん、うちに泊

る気なの⁉」
「はい、よろしくお願いします。お金はこちらです。きがえは駅前のロッカーに入れてあるので、かえりによってくだされば」
「ああ、はい……って、ダメダメダメ！　お婆ちゃんとか親戚のお家とかに……」
「それはむりです」
「なんで⁉」
「お母さんもお父さんも、十四歳のころにかけおちしてかんどうされた身なので、ぼく、おばあちゃんもおじいちゃんも知りません。てんがいこどくです」
がくー。銀八はその場にへたり込む。一気に逃げ道すべてを切り捨てられた。
「ということで、先生がとめてくださらないと、ぼくはえきまえに立ってゆきずりの方にみをまかせなければいけないことに……」
「ちょ……待ってよぉ。そりゃ、先生も帰省とかしないけどさあ……えぇ～……」
「ごめいわくですか……？」
ふと、震えた声に顔を上げれば、黒々とした目一杯に涙を溜めていた。ずきりと胸が痛む。それが彼の常套手段であるとは分かっていても、罪悪感を刺激されずにはいられない。
だってなんだか、小動物虐待してるみたいな気持ちになるんだもん。
「……迷惑、と言えなくもないけれども、それは飽くまでヅラくんが何も言わなかったことに対してであってぇ～……」
「お父さんとお母さんはすごくなかよしなんです」
なんか身の上話を始めたぞ。桂くんの家庭はいろいろと複雑なので、こういう幼い声で切々と語

られると中々来るものがある。
「お父さんはたんしんふにんなんです。いつもおうちにいないんです。ずっといっしょにすごせるのは長いお休みのあいだだけなんです。だから、せっかくだから、ふたりだけで行ってきてって。ぼくは先生のおうちにとめてもらうから心ぱいしないでって……」
「うーん、ヅラくんがご両親思いなのは分かるけどさ……」
「ごめんなさい、ぼくはまた、先生のごつごうを考えずにごめいわくをおかけしてしまいました……わるい子ですね、ごめんなさい……」
しゅん、と項垂れる。やや突飛で思いもよらぬ行動に出る子だが、悪意がある訳ではないし、頭が悪い訳でもない。むしろ、同年代の子供より行動力がある。それと耳年増が合わさって、子供らしくない行動をすることが多いだけなのだ。
銀八はそんな彼のことが嫌いではない。えこひいきなどは以っての外と分かってはいるが、手間がかかる子ほど可愛いと思ってしまうのは教師の常だ。それが自分を慕ってくれるなら尚更のこと。
ちょっと、手間のかかり具合と慕い方が特殊だけれども。
「……分かったよ。どーせ先生も彼女いなくてさみしい冬休みだもん。ヅラくんが一緒に遊んでくれるなら、退屈だけはしないでしょ」
桂くんがぱっと小さな顔を上げる。うっすら浮かんでいた涙が、するするっと引っ込んだ。
「おじゃましていいんですか？」
「いいんですかも何も、仕方ないでしょ。ヅラくんをどこの誰とも分からないおっさんに任せる訳には行かないんだから。とりあえず、親御さんに連絡するから……」
「あ、それはいらないです」

尻ポケットから携帯を出そうとする銀八の手を、桂くんの小さな手が押し止どめる。
「いらなくないでしょ、こーゆーのはちゃんとご挨拶するものなの。だから……」
「もうでんわつながらないです。お母さんとお父さんは、今朝のひこうきでバリへ行ってしまいました」
しん……と、一瞬沈黙が流れる。
「……え？　つまり……事後承諾？」
「そうなります」
くりんと小首をかしげる。子供はたいてい頭が大きいが、一際小柄で首が細い桂くんがこういう仕草をすると、ころりと頭が落ちるんじゃないかという錯覚に捕らわれる。
その丸い頭を両手で挟んで、ぐいと正面を向かせた。銀八は桂くんの顔をのぞき込むように膝を着いてしゃがむ。
「ヅラくん、これは体罰じゃありません」
「はい？」
「ツッコミです」
でこぴん。かなり加減して。
「あうっ」
「そういうのはもっと早く言え！」
銀八は普段は原付通勤だが、この日は持ち帰りの書類が多くなるために車で来ていた。桂くんは助手席に座り、しっかりシートベルトを締めて非常にご機嫌である。

後部座席には駅前のロッカーから回収した着替えの詰まったスポーツバッグと、スーパーで買い求めた食料品がどっさり積み込まれている。クリスマス向けの食材以外にも、カマボコや伊達巻き、昆布などのお節材料まで入っている。

「先生、おせちはかいましたか?」

スーパーで自分の身長よりわずかに低いだけのカートを押しながら、桂くんは銀八を見上げてそう言った。

「お節なんて買わねーよ、先生ひとり暮らしだもん。クリスマスだって、ケンタとケーキだけのつもりだったもん」

「じゃあ、ぼくが作りますね」

「お節を? 作れるの?」

「毎年、お母さんといっしょに作ってるので作れます」

ヅラ子さんは淫乱人妻だが、常に和服を着た純和風良妻でもある。親子遠足で御重に入った立派な弁当を持ってきていたのを思い出す。お裾分けをもらったらものすごい精力増強の漢方が含まれていて、ムラムラしたところを草むらに押し倒され、危うく青姦となりかけたのもいい思い出だ。教師としての名誉のために念を押しておく。押し倒したのは銀八ではなく、ヅラ子さんである。

「先生のおうちにお重はありますか?」

あの時のヅラ子さんのむっちりした太ももと熟女の重みある尻を思い出していた銀八の意識が、ふいに引き戻される。

「お、おじゅう? まんじゅうじゃなくて、御重?」

「おしくらまんじゅうじゃなくて、お重です」
ああ、あのむっちりしたお尻で押しくらまんじゅうをしたら、さぞや気持ちいいだろうなあ。いやいや、そうではない。不倫願望はない。必死に熟尻を脳内から追い出し、自宅の食器ラインナップを思い浮かべる。
「ない……あ、いや、あるわ。重ねるやつじゃないけど、漆塗りの四角い箱。前に高いおはぎとまんじゅう買ったらついてきて、もったいなくてとっといたやつ」
このくらいだったかな。空中に指で三十センチ四方の枠を描く。
「四つくらいあるよ」
「そんなに作っても食べ切れません。でも、それならだいじょうぶですね」
ひょいひょいとレンコンやカンピョウをカゴにほうり込んで行く。出来合いのものは一つもない。
「全部、一から作るの？」
「お母さんはそうしてました」
お節用に積まれた黒豆の袋を両手に持って、どちらがいいか眉間にしわを寄せている。小さいながらも一端の主婦のような仕草がかわいらしく、思わず笑みがこぼれた。
預かったカートの上にあごを乗せ、桂くんの横顔をのぞき込む。
「それならせんせー、栗きんとん作ってほしいな。重箱いっぱいに」
「ええー？」
さらにしわを寄せて、桂くんが不満そうな声を上げる。しわと言っても、まだ肌が柔らかすぎて溝になっていないのだが。
「先生、そのうちとうにょうびょうになってしまいますよ」

「大丈夫だよ、まだ若いもん。それに、甘い物食べて糖尿になるなら本望ですぅ」
「じゃく年せいせい人びょうって知らないんですか？　それに、先生はほんもうでもぼくはこまります」
「困りますって、なに？　まさか、将来の介護とか言い出すの？」
「とうにょうびょうは男せいきのうの低下をもたらすと聞きました。ぼくと先生のあいだにはれて法的なしがらみがなくなる十年ごまで、先生の男せいきのうがたもたれていなければ、ぼくはひじょうにこまります」
ざっしゃーーーーー。
思いっ切り前のめりに倒れた銀八の手元からカートが飛び出し、混雑したスーパーの通路を疾走して行く。きゃーきゃー奥様たちの悲鳴が聞こえるが、起き上がって謝る気力はなかった。
「どうなさったんですか、先生？　もしかして、十年ごまでお預けだと思ってしまったんですか？　だいじょうぶですよ、それまでもこっそりしてしまえばよいのです。しかし、十年たてば、なんのえんりょもなく、いっしょにいろんなところに行けますし、青かんプレイやちかんプレイをしてもつかまるおそれは……」
「黙ってええ！　ヅラくん、お願いだからそれ以上、しゃべらないでええええええ！」
銀八はがばりと起き上がると、桂くんの口を抑えると同時にその小さな体を小わきに抱え、精肉売り場に突き刺さっていたカートを回収し、空いたスペースに桂くんの尻を乗っける。ざわつき始めた奥様たちから逃れるように、レジまで一直線に走った。
自分の顔が真っ赤になっているであろうことが、くらくら揺れる視界で分かった。
「あ、せんせい、まだくりを買っていません。これではくりきんとんが作れませんよ？　いいんで

すか？　先生、くりを忘れてます。くりを買わないと……」
「クリクリ連呼するなあああ！」

……スーパーでの醜態を思い出し、銀八はハンドルを握りつつため息を吐く。
ちらりと横目で見れば、桂くんは黒豆の袋の裏を見て煮方をおさらいしていた。
「……ヅラくぅん、あんまり人前でああいうこと言わないでねえ？」
「ああいうこととというと？　ぼくと先生がしょうらいをちかいあったという話ですか？」
「そうじゃなくて！　いや、そうでもあるんだけど！　つか、将来を誓い合った記憶は、先生ないんだけれども！」
「またまた、はずかしがってしまって。だいじょうぶですよ」
きゅっと袖をつかまれ、銀八はそちらを振り向いた。信号待ちでよかった。
「ぼく、十年ごでもずっと先生がだいすきです。ぜったい、だいすきです。だいじょうぶですよ」
子鹿のような黒くてつぶらな目。ひび割れなどとは無縁な、ぷっくり潤んで膨らんだ桃色の唇。
幼いながら、いや、幼いからこそ美しい顔をしている。まだ内側に芽生える前の多大なエネルギーを抱え、それが薄い肌を通してきらきらと輝いている。銀八が子供たちに接して思うのは、そういうことだ。疲れることも絶望することも知らない小さな体は、まさにこれから殻を破る卵で、その中には銀八以上のエネルギーと可能性に満ちあふれている。
銀八は桂くんの目からそっと視線を外した。
「……然様ですか」
「しんようしていませんね？」

「だってさあ、十年後って言うけどさあ。じゃあ、十年前のヅラくんは何してたのよ」
「生まれてません」
「でしょ？　生まれるどころか、ようやくお母さんのお腹の中で人間の形になって来た辺りだよ？　そのころのことなんか、覚えてないでしょ」
「そりゃあ、そうですけれども」
「だから、十年後には先生のことなんか忘れちゃうよ」
信号が青に変わり、銀八はゆっくりアクセルを踏む。
「ヅラくんが大きくなって、高校生になって大学生になって、いろんな人に出会って、好きな子が出来て、先生のことなんか忘れちゃうよ。きっと」
きっとそうなる。そうなるべきだ。桂くんの未来はもっと大きな可能性で満ちあふれているのだから、こんな駄目な小学校教師一人が占有していいはずがないのだ。
「……そんなこと、ないと思います」
あいにくとその悲しげな桂くんの表情は、銀八の視界には入らなかった。
「ぜったい、そんなことないと思います」

■クリスマスイヴのお話

夕方、予約していたフライドチキンを受け取って銀八が帰ってくると、１ＬＤＫの中は甘いミルクの香りで満たされていた。

「先生、おかえりなさーい。すいません、いま手がはなせないんですー」

桂くんがシチューを作ってくれているのだ。これはホワイトソースの香り。

小学生一人を残して火を使わせることに躊躇いがあったが、『いつもお母さんがおしごとのときは、ぼくが夕ごはんを作ってますよ』という言葉を信頼して任せてみた。正解だったようだ。

玄関のドアを開けると、出来立てのご飯の香り。十代の半ばからずっと一人で暮らして来た銀八にとって、それはほとんど経験したことがないものだった。家族がいたころも、『先生』がいたころも、彼らはとても忙しくて銀八のために夕食を作ってくれることはほとんど無かったのだ。

思わず鼻の奥が痛くなりそうで、チキンの袋に顔を埋めてそれをやり過ごす。髪に油の匂いが移りかけたころ、ようやく切なさを振り払った銀八はスリッパに履き替え、狭いキッチンに足を向けた。

「ただいまー。ビスケットも買って来たけど、ヅラくんは好きだった……け……？」

キッチンに頭を突っ込むと、眼前に臙脂色の丸い柔らかそうな物体がふりふりと揺れていた。

「あ、ありがとうございます。ごはん代わりはそれでいいですよね」

「う、うん、そうね……」

「先生、このザルがとれないんですけれども……」

「その前に、あの……なんでブルマー履いてんの、ヅラくん⁉」

ブルマーだ。紛う方なき、銀魂小学校第三学年指定の臙脂色に白の二本ラインのブルマーだ。ちなみに、銀小では三年周期で学年色が入れ替わり、現在は六年と三年が臙脂、五年と二年が深緑、四年と一年が紺になっている。どうでもいい。

「おりょうりするんで、よごれてもいいかっこうじゃないと……」

桂くんの私物であるフリフリエプロンの下の上半身は、これまた冬季用体育着の臙脂二本線のジャージ。すんなりと伸びた細い足には、先程と同じ黒いニーソックス（そう、何故か桂くんはニーソックスを愛用している）。そして、丸くて小さくて、まるで大福のようなふにふにしたお尻は臙脂色の半光沢生地に包まれていた。

で、今は椅子に重ねたミカン箱の上に立って戸棚を覗いているので、ちょうど銀八の視線上にそのお尻が揺れている。

「と、ともかく降りなさい！　危ないから！　ザルなら先生が取ってあげるから！」

「あ、おねがいします」

脇から抱きかかえて、下に下ろす。生徒を抱えるたびに思うが、なんで子供というヤツはこんな痩せてるくせにこんなに柔らかいのだろう。なんというか、関節自体がふにゃふにゃしている。猫の抱き心地に近いかもしれない。

戸棚の奥に入っていたザルを手渡したあと、ミカン箱を下ろし、椅子をリビングに片付け、もう一度キッチンに戻る。

……やっぱりブルマーだ。何度見てもブルマーだ。

「ヅラくん、なんでブルマーなの……」

「もー、言ったじゃないですか、おりょうりするから……」

「そうじゃなくて、なんでヅラくん、ブルマー持ってるの!?」
おかしいだろう。百歩譲って、体操着で料理しているのはいい（それでも十分おかしいが）。何故、ブルマーだ。何故、短パンじゃないんだ。
「先生、ブルマーはおきらいですか？」
「はい？」
「ブルマーにトラウマとかおもちですか？」
「いや、持ってませんけど……つか、ブルマーのトラウマってどんなの？」
「ブルマーをはいた犬にかまれた思い出ですとか」
「ないよ、そんなの！　どこの世界にブルマーはいた犬がいるんだよ！」
「じゃあ、ブルマーはおすきなんですね。それならいいじゃありませんか」
「よくなーい！　その、嫌いじゃないし、コスプレの一つとしては好ましく思っているけど、それとヅラくんがブルマー履いてるのは全く別問題ー！」
銀八が問い詰めている間にも、桂くんは淡々とブロッコリーを茹で、ザルにあけて青々とした色合いに満足げな笑みを浮かべている。続いて鶏肉の下ごしらえに入るようだ。
キッチンの高さは桂くんの身長に対して少しだけ高すぎる。故に、ずっとミカン箱に乗って作業をしているのだが、おかげでちょこまか動く小さなお尻が銀八の目線からもよく見えて仕方がない。先ほどのような眼前超ドアップではないものの、十分目の毒である。
普段の体育の授業で女子生徒がブルマーはいててもなんとも思わないのに、『キッチンでエプロンつけた教え子がブルマーはいている』というだけで、何故、こんなにもいやらしく感じるのだろう。
「だって、ほら、色合いがサンタさんっぽいじゃないですか？」

「確かに赤と白だけど！　そんなら短パンでいいじゃん、ブルマーじゃなくていいじゃん！　つか、どこで買ったのそれ⁉」
「まきの屋さんです」
「そりゃそうだろうよ、うちの指定販売店はマキノ洋品店さんです！　そういう問題じゃなくてー！　あー、もー、なんて言えばいいのかなー⁉」
混乱のあまり、冷蔵庫に頭をぶつけ始めた銀八を見て、桂くんは少しだけ困った風に口を開く。
「……お母さんからのクリスマスプレゼントです」
「はぁぁ⁉」
「ブルマーがきらいな男の人はいないって」
ヅラ子さん、アンタって人は。
冷蔵庫を抱きしめたまま、ずるずると銀八は床にへたり込む。あの保護者は子供にかける愛情目体は本物なのだが、どっかがものすごくズレている。やっぱり淫乱人妻だからだろうか。
「先生、そこどいてください。牛にゅうをだします」
「はーい……っ⁉」
床に突っ伏していた銀八が首を回すと、ちょうどそこには桂くんの細い太ももがあった。しかも下から見上げているものだから、エプロンの影になっていた透き通るように白い内ももや、その……内側にイケナイモノを秘めたぷにっとした股間部分とか……丸見えになってた。
思わぬローアングルショットに、銀八の身体が一瞬硬直する。見るからに柔らかそうなデルタ地帯から目が離せない。ダメだ銀八、こんなものに性的なものを感じてはダメだ。それは教師としてダメだ！　いや、人としてダメだ‼

必死に自分に言い聞かせるのだが、どうにも動けない。ほんの数秒間が、とてつもなく長い時間に思えた。
その不自然な空白に、不自然に縫いとめられた銀八の視線の先に桂くんが気付く。ぽっと頬を赤らめ、
「先生のえっち！　ごはんができるまで、おへやでまっててください！」
「あいて」
ぽこんと叩かれてキッチンから追い出される。
「えっち……って……」
見せてたの桂くんじゃん。見せる気で着てたんじゃん。
納得いかないものを抱えつつ、銀八は玄関に置きっぱなしだったもう一つの買い物袋を抱えて、素直に寝室に入った。

「せんせーい、ごはんできましたよー」
「……はーい」
手持ち無沙汰にやっていたPSPのスリープボタンを押し、銀八は上着の背中に小さな包みを隠す。軽く全身を見回し、埃などがついていないかを確かめる。一応、クリスマスディナーなのだから、いつもの縮れ毛つき放題のフリースパジャマではいけないだろう。
部屋着を多少こぎれいにした程度の格好でリビングに出れば、そこに広がっていたのはまさにクリスマスだった。
「……おおう」

思わず感嘆の声が出る。

コタツの中央に据えられたケーキは、お取り寄せの中でも一番デコレーションが豪華な一品。チキンとビスケットはちゃんと大皿に出され、コールスローもガラスの器に盛り付けなおされている。フライドポテトやカナッペは、キッチンの奥に眠っていた冷凍食品やクラッカーを桂くんが発掘したものだ。

手料理はクリームシチューだけだが、普段の形ばかりのクリスマスの食卓とは全く違っていた。皿に盛り付けるだけなのに、こうも変わるものだろうか。

いや、多分違うのはそれだけじゃない。

「先生、早くすわってください」

くいくいと手を引かれる。この食卓の功労者である桂くんがにこにこと銀八を見上げていた。

……あ、まだエプロンブルマーなのね。

「すごいね、なんだか。ケンタとケーキなのはいつものことなんだけどさ」

「クリスマスですからね」

そうなのだ。これは、桂くんが銀八をクリスマスを祝おうとして、一生懸命作り上げた食卓なのだ。いつもの箱に入れっぱなしのチキンとトレーからホールごと食べてしまうケーキとは全然違う。こめられているものが全然違う。

「うん、あの……ヅラくん」

「はい？」

「ありがとな」

極自然に口から出た言葉だった。それを聞いて桂くんは、二回ほどぱちくりと瞬きをし、そして

前以上の満面の笑顔を浮かべる。
「先生、さめちゃいます。ほらほら」
「あー、はいはい」
引っ張られて席に着く。桂くんが椅子によじ登り、テーブルの上に小さな頭が飛び出してきた。
「なんかクッションとか持ってこようか？」
「だいじょうぶです。おきになさらず」
そう得意げな表情で、銀八の顔を見てにっこり笑う。
「先生、クリスマスおめでとうございます」
「はい、おめでとう。普通はメリークリスマスだと思うけど」
意味は同じか。スプーンを持って、いただきますの声を合わせる。まだミルクの香りがぷんと立ったクリームシチューを口に運ぶ。
「あ、おいしい」
「ほんとうですか？　よかったです、お口にあって」
本当に嬉しそうに桂くんが笑う。普段の澄ましたお人形のような表情とは全く違う、年相応の笑顔だった。柔らかいほっぺがむにっと横に広がって、顔全体がまん丸に見える。
ちゃんと子供らしい笑顔、というのを、初めて感じた。
「うん、おいしいよ。すげーねヅラくん、こんなの作れちゃうんだ」
「さびしい男はりょうりでおとせというのが、お母さんからのきょうくんなんです」
「……それは出来るだけ言わないでおこうね」
悪かったな、さびしくて！　事実だけど！　教え子がクリスマスパーティの準備をやってくれた

ってだけで、感動しかけるくらいさびしいけれど！

チキンにかぶりつこうとしている桂くんの小さな口の周りが油で汚れてしまうのを見て、骨から肉を外してやったり、カナッペに塗られたハチミツ入りクリームチーズの美味さに驚いてみたり。適度に腹が膨れた辺りで、『残りは明日にしましょうね』とテーブルの上が片付けられ始める。

タッパに詰め替えたりラップを掛けたりとちまちま動き回る桂くんの姿を横目で追いながら、銀八は背中のものをいつ出そうかと思案していた。

「先生、そろそろケーキきりますか？」

「そうだねー。……あ、その前に、ちょっとおいで」

今しかないだろう。桂くんは脱いだエプロンで両手を拭きつつ、ちょこんと銀八の前に正座する。

「えっとね……はい、どうぞ。クリスマスプレゼント」

すっかり背中で温まった紙包みを差し出す。まさかそんなものを渡されるとは思っていなかったようで、桂くんはただでさえでっかい目をさらに大きく見開いている。

「え、その、いいです！　だってこんなの……先生、いつ用意して……！」

「うん、さっき買ってきた。クリスマスにプレゼント無しってのもさびしいでしょ。ご飯作ってくれたしさ」

「でも、あの、えっと……その、おしかけてごめいわくかけているわけですし、こんなのは……」

なんとか包みを差し戻そうとする桂くんの手を取って、半ば無理矢理プレゼントを押し込んだ。

「いいのいいの。子供が遠慮するんじゃないの。……つか、ヅラくん、もしかして押されると弱いタイプ？」

顔を真っ赤にしてオロオロしている姿が面白い。普段はこちらが崖から落ちかけるくらい押せ押

せなのに、たまにこっちから仕掛けてみたらこれだ。どれだけマセていても、駆け引きなど出来ない子供なのだなと実感する。

……別に駆け引きしているつもりないけどさ。飽くまで、教え子へのプレゼントだし。

「あの……開けていいですか？」

「どーぞどーぞ」

クリスマス柄の包み紙を破らないように、そぅっと剥がして慎重に開けている。ぱりぱりと音を立てて、中身が現れた。

「うわぁ、エリザベスだ！」

商店街の雑貨屋にあった『宇宙怪獣ステファン』のマフラー。もこもこのボア素材で出来たそれを見つけたとき、桂くんが『ステファン』のぬいぐるみにエリザベスと名付けて大事にしていることと、彼が無類のもこもこふわふわ好きであることを思い出して、つい買い求めてしまった。

「気に入った？」

「はい！　ありがとうございます！」

ふわふわの白いボアに顔を埋め、ニッコニコと頬擦りしている。これだけ喜んでもらえたなら、プレゼントした甲斐があるというものだ。

「よし、そんじゃケーキ食べようか」

「あ、あの！　その前に！　僕からもクリスマスプレゼントを……！」

もこふわに夢中になっていた桂くんが、我に返ったように声を上げる。

「なに、そんなん用意してきたの？　いいよ、クラスからのプレゼントはもらったし、ご飯も作ってもらったし。子供が余計な気を回すんじゃないって、いつも言ってるでしょ？」

「でも、もうもってきたんで！　あの、ちょっとまっててください！」
マフラーを抱えたまま、パタパタとリビングから出て行く。ガチャガチャと音がしたので、荷物が置いてある寝室へと入ったのだろう。
「……ほんとにいいんだけどな、プレゼントなんて」
一緒にクリスマスを過ごしてくれただけで十分だ。ここ数年、彼女もいなかったし家族もいない銀八にとって、クリスマスなどのイベントは逆に孤独をかみ締める日になりやすい。そういう日に、自分を慕ってくれている教え子が精一杯ともに楽しもうと頑張ってくれた。それだけで本当に嬉しかった。
マフラーを買ったときはちょっとした気まぐれのつもりだったのだが、今は本心からのプレゼントだった。桂くんが持ってきてくれた贈り物の大きさには適わないが、ほんの少しだけでもお返しができた。これ以上何かを貰ったら、何を返せばいいのか分からない。
性的なお返しとかは無理だし。それを要求されかねないことを思うと、頭が痛くなってくる。
「せんせぇー！　おまたせしました！」
「んあ？　はいはいって……何それぇ⁉」
リビングのドアから飛び込んできた桂くんは、なんと、サンタ服に着替えていた。
正確に言うと、サンタガールの服に。
超ミニのフレアスカートに、おヘソ丸出しのノースリーブの上着に、ロング手袋。足元は相変わらずのニーソックスだった。首周りには気の早いことに、すでにエリザベスマフラーが巻かれている。
「やっぱりプレゼントをもってくるのはサンタさんじゃないと」

そういって、肩に担いだ白い袋を揺する。まあ、そうだけれども、そういう問題じゃない。
「なにその服、わざわざ持ってきたの⁉　つか、そーゆー服、桂くんが着れるサイズってあるの⁉」
ハンズなんかに売ってるのは、大抵成人女性用だろうに。
「これは、お母さんとぼくで夜なべしてぬいしました」
「ヅラ子さん、万能お母さんだな、おい！」
今時、子供の服が縫える母親は少ない。もっと普段着とか縫ってやってください、お願いですから。
「ほーら、先生！　さびしいどくしん男せいのおうちに、かわいいサンタさんがやってきましたよー。いかがですか？　どうですか？」
「……まあ、かわいいけれど……こんな一発ネタのために大変ね、ヅラくん……」
「クリスマスというのは、えてしてそういうものです。ほらほら、ちゃんと下は先生のすきなブルマーですよ」
「めくるなあ！　あと、先生は嫌いじゃないってだけで、好きとは言ってません！」
危うく、先ほどの魅惑のデルタ地帯が見えそうになって、慌てて桂くんのスカートを抑える。ブルマーむき出しだとそこまでいやらしく感じないのに、上にエプロンだのスカートだの一枚掛かると、何故ここまでエロティックになるのか。これがチラリズムの魔力というヤツだろうか。
「先生、これからコタサンタさんがプレゼントをあげますので、目をつむってください！」
「はいはい……」
せっかく衣装まで用意してきたのだから付き合ってやるしかあるまい。なんとなく胡坐から正座へ居住いを正し、プレゼントとやらを待つ。なんか、目の前でごそごそしている気配がするけれど

も……

ぷにゅ。

あ、なんか柔らかいものが唇に……って、

「……しまったあああ！　油断したあああ‼」

「あっ、バレた」

やっぱりそうだ、思ったとおりだ！　カッと目を開き、目の前3センチにあった桂くんの顔を慌てて引き剥がす。

「バレたじゃないよ！　ヅラくん、今なにして……！」

「クリスマスプレゼントは、ぼくのファーストキッスです」

きゃっ、と、照れて顔を隠す。今更何を照れてるの、この子。

「ふぁ、ファーストキスって、あのねぇ……！」

「お嫌でしたか？　気に入らなかったですか？」

「イヤじゃないけど！　そういう問題じゃなくて……！」

気持ちよかったけれども。ぷるぷるふにふにのお子様唇の感触は、確かに気持ちよかったけれども！

「そういうのは大切にしなさいって何度も言ったでしょ！」

「だから、先生にさしあげました」

にっこりと微笑んで言われては何も言えない。嬉しくないとは言えない。そんなことを言ったら

傷つけることになる。第一……嬉しくないということはないのだ。
「先生？　どうなさいました？」
がっくりと床に手を突く。今までも桂くんに教室でキスやらそれ以上やらを迫られたことは何度もあった。その度に『淫行だから』とか『ゾラくんの初ちゅーは未来のお嫁さんのものだから』とかなんとか逃げてきたのに、一瞬の油断で全てパーである。バカバカ、銀八のバカ。クリスマスだからって脇を緩めてんじゃねーよ。
「あ、分かりました。キッスだけではふまんなんですね。それでは、ぼくのぬぎたてほかほかブルマーを……」
「ちがーう！　脱がんでよろしーい‼」

■大晦日のお話

「先生、おそばのおかわりはいかがですかー?」
「んー、もういいよ。台所はもういいから、コタツ入りな」
「はーい」
エプロンを外した桂くんが何の遠慮もなく、銀八の膝の間に入り込む。桂くんの私服はほとんど半ズボンなので、見ているこっちが寒くて仕方がない。
もう、桂くんが膝に入ってくるのを拒否するのはやめた。『おひざに乗せてくれなければ、夜、先生のおふとんにしのびこみます』とまで言われては、下手に拒むわけにいかないし。
それに、冷え込んだ冬の空気に子供の高い体温は心地よい。アンカ代わりと思えばいいんだ。細くてしなやかなミニチュアボディになんだか変な感じになりかけるのは俺の気のせいだ。うん、だから大丈夫。
「先生、年こしはおわらい派ですか?」
「うん、そうだねー。ここ数年はこれだねー」
テレビでは、『数々のトラップが仕込まれた建物内で、思わず笑ってしまったら尻を叩かれる』という年越し番組をやっている。どうも銀八は、カウントダウンというのを堅苦しく感じてしまうのだ。お笑い番組を眺めながら、なんとなーく過ぎていくのがちょうどいい。こういう番組が始まる前までは、借りてきたビデオやＤＶＤを見ながら過ごしていた。
桂くんは膝の間で、銀八のためにミカンをむいたり、お茶を淹れなおしたりと忙しない。冬休みの間、世話女房を決め込むようで、大掃除もお節作りも銀八は力仕事以外殆ど手伝わせてもらえな

かった。まあ、楽だし、桂くんも楽しそうなのでいいんだけれども。
「先生、あーん」
「はい、あーん」
顎の下から差し出されるミカンにぱっくり食いつく。甘い。美味い。桂くんの細い指が、唇の端についたスジを取るのがこそばゆい。
……あー、なんか慣れちゃってるなー。大丈夫かなー、これ。
一応、同衾やらお風呂やら一線は保っているつもりだが、傍目にはとっくに『先生と生徒』を飛び越えているのかもしれない。ほだされるとはこのことか。
テレビではお笑い芸人が尻を叩かれて悲鳴を上げている。いたそうですねえ、という桂くんの言葉に、そーねーと気のない返事をする。なんという平和な大晦日。
その平和が崩されてきたのは、年越しまであと十分ほどになってきた辺りからだ。
なんだか、桂くんがもぞもぞしている。足の間で居心地悪そうに、身体をよじっているので妙にくすぐったい。
「どしたの、ヅラくん。おトイレ行きたいなら早く行きな」
「ん……なんか……そういうのとは違うんですけど……」
妙に歯切れの悪い返答。何があったのか、軽い気持ちで顔をのぞき込んでみる。
「……ヅラくん、お顔真っ赤だけど……」
頬を火照らせ、目は涙に潤み、息はハァハァと荒い。本来であれば、風邪や発熱を心配するところだが、桂くんの場合は事情がちょっと違う。
「あの……テレビの人がおしりぺんぺんされてて……いたそうだなあって……もう、おしりまっか

になっちゃって……じんじんするんだろうなあって思ったら……」
はぁん、と、湿ったため息を吐く。
「ぼくのおしりもじんじんしてきて……」
「ヅラくん、スパンキングで欲情しないでぇぇぇぇ！」
なんなのこの子、天性のドMなの⁉
まずい、これはまずい。テレビで尻叩きが行われるたびに、桂くんの小さな身体がぶるりと震える。チャンネルを変えようとしたが、リモコンはいつの間にか桂くんに握られていた。
「だって……ときどき、おりょうりしっぱいしたとかで、お母さんもお父さんにおしりたたかれてますし……そのたびに、お母さん、ゆるしてあなたって言いながらとても気持ちよさそうで……」
「息子にどんなプレイ見せてんだよぉ、あの夫婦！　ちょ、だめ、ヅラくん！　リモコン返して！見ちゃだめ、これはヅラくんには刺激強すぎるから見ちゃだめ！」
「ああっ！　あんなはげしくたたかれてるぅ……！」
はぁ、はぁと、桂くんの息は荒くなる一方で、小さなお尻は半分浮いてくねくねと揺れている。
「先生……あの……リモコンかえしますから……」
「うんうん、いい子だね？　どうする、クイズ番組でも見る？」
「ぼくのおしりもたたいてくれませんか……？」
ぐぷっ。変な息が鼻から漏れた。
「いや、それは無理！　だって桂くん、何も悪いことしてないじゃん！　お仕置きでもないのにお尻叩いたら、それはただの虐待じゃん！」
「わるいこと……してます。ぼく、げい人さんがいっしょうけんめいおしごとしてるの見て、こん

なえっちな気分になっちゃってますぅ……」
くいくい、ふりふり。桂くんの腰が浮いて、銀八を誘うようになまめかしく揺れる。
やばい、膝の間でそんなことするものだから、丸いお尻が銀八のデリケートな部分をこすり上げて……！
「せんせぇ、おしおきしてください。こんなえっちな小学三年生のおしりにおしおきしてくださぁい……！」
「駄目、駄目だって、ヅラくん！　離れなさい、ちょっと離れなさい！」
なんとかコタツから桂くんを引きずり出そうとするが、くねくねもがく身体をつかみ損ねたことと元が異様に密着していたせいで、狭い空間で桂くんの身体を抱き寄せたような形になってしまった。
「うっ……！」
「あ、せんせぇ、これって……！」
やばいやばいやばい！
桂くんの、桂くんの丸くて柔らかくってふよんふよんのマシュマロみたいなお尻の谷間に、ぴったりとアレが、理性に逆らって肉欲の権化へと姿を変えつつあるバベルの塔が……！
「せんせぇもわるい子なんですね……！　こんな……あっつくなって……！」
「悪い子じゃありません！　先生悪い子じゃありません！　これは不可抗力です、男という生き物の生理反応です！　違うの、本当に違うの、だからあの、お尻振るのやめてええええ‼」
天に向かってそびえ立ちつつあるバベルに沿って、桂くんのお尻がぽよんぽよん跳ねている。
ああ、駄目だ。ジャージ越しとは言え、これは駄目だ。

俺、今、教え子にケツズリされている。九歳児の尻でコカされてる……！

「せんせっ……！　ほんとにやめてほしいんですか？　すごくぎゅってされてるんですけど……」

「それはぁ……それは違うんだってぇ……」

腰にジンジンと熱い疼きが込み上げる。なんとか離れたいのだが、股間を擦り上げる魅惑の柔らかさに自分から腰を振らないよう抑えるのが精一杯で、立ち上がることも力を入れることもできない。

「あぁ……やべっ……これ、やべっ……！」

「あぁん……！　せんせぇ、わかりますっ……⁉　じゃやのかねが聞こえますよ……！　ぼんのうをほらってるのに……せんせぇはどんどんぼんのうがふえてますよ……！」

ああ、確かに聞こえる。裏山にある寺の鐘だろう。一突きする間に三往復のテンポで、桂くんのお尻は跳ね続けてる。

なんだか頭がぼうっとしてきた。腕の中の身体にすがりつけば、子供の高い体温とミルク臭い体臭に目の前がかすむ感覚に捕らわれる。規則正しく揺れる桂くんのポニーテールが銀八の頬をくすぐってこそばゆい。

「せんせっ！　このまま、このままいきましょう……！」

「ふぇ？　このまま……って……」

「年こしまで……あと一分ですっ……！　このまま……年が変わるしゅんかんに……せんせぇとぼくのいっせんを……！」

あと一分？　確かにテレビの上の電波時計はあと四十五秒ほどで日付を変えるけど。

このまま？　一線？　どういうこと？　もー、なんか気持ち良すぎてわかんない。

「せんせっ……せんせっ……びくびくしてるっ……！　せんせがぼくのおしりでびくびくしてるぅ……!!」
「あー……やっべ、出……」
あと5秒。その瞬間に、最後の理性の灯火がよみがえった。
やばい。まずい。このままでは本当に一線を越える……！
「あっ……あっ……！　せんせえ、ぼく、もうっ……！」
「……って、ちょっと待ったぁぁぁぁぁ!!」
思いっきりコタツを蹴り出し、身体を引きはがす。急に寒気に晒された桂くんの太ももがぶるっと震えた。
「あっ……あぁぁぁんッ！」
ぴくぴくっと白い内股が痙攣するのが目の前に見えた。同時に電波時計は、23:59:59 から 00:00:00 に切り替わり、除夜の鐘の最後の一突きが耳に届いた。
「や、やばかった……今のは本当にやばかったぁ……！」
危うく、旧年最後にして新年最初のショットを教え子の尻コキで行うところだった。それは駄目だ、それに至ってしまったらもう言い訳できない。
「あぁん……せんせぇ、ひどいです……もうちょっとだったのに……」
ぴくぴくと身体を震わせながら、桂くんが切ない声を漏らす。
「え、もうちょっとって……ヅラくん、もしかして……！」
「んんっ……先生、ご心ぱいなさらずに。ぼく、せいつうはまだですから」
がくー。思わず床に手をついた。そりゃ、年齢的にまだだろうけれど、それにしたってその言い

ようは……

「あ、先生、あけましておめでとうございます」

「……はい、おめでとうございます」

新年最初の会話が、賀詞ではなく精通の有無。今年一年の先行きを占うかのような会話である。

「おとしだまは、先生のこだねがほしいです」

「子種って言わないでぇぇ！　今の俺、一触即発だから、ちょっとでもエロいこと言わないで、お願いだからあぁぁぁ！」

■初詣のお話

「うっわ、混んでるなぁ……」
「ほんとうですねぇ」
三が日も最後になれば多少は落ち着くと思ったのだが、見通しが甘かったようだ。近隣で一番大きな神社の参道は、参拝客でごった返していた。
「ヅラくん、手離しちゃ駄目だよ」
「はい、先生」
クリスマス以来、すっかりお気に入りのエリザベスマフラーを巻き、お年玉代わりに買ってあげたエリザベスイヤーマフをつけてすっかりご機嫌な桂くんは、しっかりと銀八の手を握り締めた。
もっと小さな神社で済ませるという手もあったのだが、せっかくの年始、すべて近場で済ませるというのも味気無い。
あと、ここの神社は甘酒がうまい。これを飲まないと一年が始まった気がしないのだ。
「先に甘酒もらいに行くよー」
「はい、わかりました」
人込みの中を進んで行く。社務所を目指して拝殿に向かう人の流れを斜めに突っ切る形なので、あちこちぶつかってはもみくちゃになる。銀八にとってはさほど苦労ではないが、まだ小さい桂くんにとってはちょっと大変かもしれない。
「ヅラくん、大丈夫ー？」
ふと振り返ってみると、

「せんせぇー、助けてぇー……」
「ヅラくぅん⁉」
ちょうど成人の腰辺りに頭が来る桂くんは、マフラーは顔までずり上がり、イヤーマフは頭から外れかかって、ものすごい状態になっている。ちょっとしたレイプだ。
「ヅラくん、こっちおいで！　ほら！」
「あぅ～……」
半泣きで駆け寄ってきた身体を抱き上げる。桂くんほどの身長だと肩車は不安定で怖いし、背負って視界から消えるのも不安だ。腰から下を抱える形で持ち上げれば、桂くんは首周りにひっしとしがみついてきた。ぐすぐすと半べそをかいている。
「うう、先生……ぼく、よごされてしまいました……」
「へぁっ⁉　よ、汚されてないよ！　ちょっともみくちゃになっちゃっただけじゃん！」
「先生からいただいたマフラーが……」
よく見れば、白いマフラーの端っこにお好み焼きだかたこ焼きだかのソースがついていた。
あ、そういう意味。ほっと息をつく。
「あー、こんくらいなら大丈夫、帰ったら染み抜きしてあげるから。すぐ洗えば平気平気」
「ほ、ほんとうですか？　先生、ぼくのこときらいになりませんか？　よごされちゃったぼくでもだいじょうぶですか？」
「だ、大丈夫だから！　今、周りに人がいっぱいいるから！　あんまりそういうこと言わないで、誤解されるから！」
今、隣り通り過ぎてったカップルがすごい不審な目してた！　まあ、気持ちは分かるけど！

しゃくり上げる桂くんをなだめつつ、社務所で無料配布の甘酒を受け取る。あいにくと休憩所のベンチは全て埋まっており、人通りも激しいので仕方なく桂くんを抱えて立ったまま、甘酒をすする。

米麹の自然な甘みがふわりと口の中に広がり、ほのかなアルコールが身体を温める。ふあー、うまっ。湯気で火照った頬で銀八は息をつく。

その温まった頬に視線を感じて首を傾ければ、桂くんがじーっと銀八の口元を見ていた。

「どした？　お腹減った？」

「……あまざけ、おいしそうですね」

紙コップに目を落とす。ここの甘酒は、製法の関係か少しだけアルコール分が残っている。成人であれば頬が火照るくらいで済む量であるし、実際車での参拝客にも配られている。

それでも、念のため、銀八は車ではなく電車でここまで来た。アルコールはアルコールである。万が一、酒酔い運転で人様から預かった大切な生徒を事故に巻き込んでしまったら、クビどころか腹を切っても申し訳が立たない。

「ダメです。これはお酒です」

「えぇー！」

「ヅラくんにはさっき買ってあげたココアがあるでしょ？」

「もうのんじゃいました。ぼくもあまざけがのみたいです」

「だぁ～め」

「やだぁ、せんせい、のませてください！」

桂くんが、食べ物のことでこんなに駄々をこねるのは珍しい。本来であれば、同衾やキスより、

甘いものを強請るのが子供として正しい姿である。その可愛らしい仕草に悪戯心が芽生えた銀八は、あえて桂くんによく見えるよう、さも美味そうに甘酒を飲み始めた。
「あー、美味しいなー。甘酒おいしいなー。甘くてトロトロしてて美味しいなー」
「やー！　先生のいじわる！　ひとくちだけでもいいじゃないですか！」
ぐいぐいとコートの襟を引っ張ってくる。
やべえ、可愛い。ニヤつく頬を隠すこともせず、銀八は最後に残った一口を飲み干そうと紙コップを傾け天を仰いだ。
「おねがい、先生！　先生の白いの、ぼくにのませてください！」
ぶほっ！
銀八は天に向かって麹カスを吹き上げた。勢い余って熱い液体が鼻に回り、泣くほど痛い。
「いじわるしないで、じらさないでぇ！　どろりのうこうであつくてあまぁい先生のはくだくおしる、ぼくのお口にのませてくださぁい！　ぼく、ぼくもうガマンできなくて……！」
「ちがっ……！　違いますよ⁉　そういうんじゃないんですよ⁉　この子ちょっとボキャブラリーが特殊なだけで……‼」
通り過ぎ行く人々、休憩所に座っている人々、社務所の巫女さん。みんなが白い目で銀八を見る。まずい、このままでは性犯罪者扱いされる……！
「おねがいします、いってきのこらずのみほしますからぁ！　あっついとろとろおつる、したの上であじわって口の中いっぱいみたして、はなのおくでどくとくのにおいまでたんのうして、ごっくんしますからぁ！　桂小太郎九才のちっちゃなお口にはくだくえきのませてくだムガムゴムガ」
巫女さんが携帯電話を取り出してどこぞに相談し始めたのを見て、銀八は桂くんの口を抑え、参

道の人ごみの中に逃げ込んだ。人を隠すなら森の中である。

「ヅラくん、だからああいうことは……」

「先生がいじわるするからです」

どうやら仕返しだったらしい。

桂くんはすっかりご機嫌斜めになってしまった。賽銭を投げても、まだ気が治まらないようだ。

「あーあ、どうしようかなっ！　ほかにも色々言っちゃおうかなっ！　先生がおおみそかの夜にぼくのおしりにすりすりされてこーふんしたこととか、初ゆめでおもちを食べるゆめを見て、起こしにきたぼくのおしりにカプってしたこととか……！」

「待ってぇぇ！　謝ったじゃん、それは謝ったじゃん！　本当に寝ぼけてたんだって、あれは本当に過ちだったんだって！　忘れてくださいって土下座までしたじゃん、先生！」

「まさか、はじめてのキスマークをあんなかたちでつけられるなんて……」

「わーわーわーわー！　さあ、ヅラくん、何を食べようかなっ⁉　綿あめ⁉　チョコバナナ⁉　それともシブいとこでべっ甲飴とかいっとく⁉」

桂くんの声を掻き消すように、銀八は大声を上げる。参道の両脇には屋台が立ち並び、食欲をそそるジャンクフードが銀八を誘っていた。

「……かってくれるんですか？」

「もー、何でも買ってあげちゃう！　ヅラくんが黙っててくれるなら、一回三百円でパチモンＤＳしか当たらないくじだってなんだってやらせてあげちゃう！」

「それならたべものより、あっちがいいです」

桂くんが指差したのは、特設のテントでおみくじやお守りが売られている一角だった。
「なに？　お守りほしいの？　学業成就？　金運招来？」
「えっと、これじゃないです。もっとあっちです」
まだ桂くんを抱えたままの銀八は、言われるがままに陳列された色とりどりのお守りを探していき……
「これです！　これがほしいです！」
縁結びのお守りだった。ストラップに付けられるくらいの小さなもので、ハートをかたどった可愛らしいお守り。女性用と男性用なのか、ピンクと青の二色があった。
「……えぇ～……」
「なんですか？　口ごたえをするのですか？　ならば、一月二日の朝に先生が……」
「はい、分かりました！　買わせていただきます！　ヅラくんは男の子だから、青がいいかなっ!?」
「りょうほうかってください。青とピンク、りょうほうほしいです」
一個七百円。不況のせいか、正月需要なのか、結構なお値段である。二個合わせると、エリザベスマフラーとほぼ同額なんですけども。
まあ、大人に取っては大した額ではない。巫女さんに二個とも包んでもらい、『福がありますように』とにっこり渡される。その素朴な笑顔が可愛くて思わず銀八も相好を崩したら、桂くんに耳をつねられた。嫉妬することないじゃん。
「はい、どうぞ。二個もどうすんの？　ランドセルと携帯につける？」
「えっとですね。こっちは先生のケータイにつけてください」
桂くんから渡されたのは青のお守り。

「……マジですか」
「マジですよ?」
「え?　つけなきゃダメ?」
「だめです。しんがっきがはじまってもつけててください。ときどきチェックします。もしもついていなかったばあい、かえりの会で一月二日の朝に先生が……」
「つけさせていただきます!　大切に致します!」
「よいおへんじです」
ようやく桂くんのご機嫌が直ったところで、ようやく人ごみを抜けることが出来た。いい加減腕がしびれ始めたので、桂くんには降りていただく。それでも手だけはしっかりと握っていた。まだ人が多い、迷子になっては事である。
「あー、しまったわ……先生、マジで人生のミスポイントだわ……」
「じごうじとくなのです」
トラップを仕掛けたのはそっちじゃないか、と言いたくとも、子供の仕掛けたトラップに引っかかる大人が悪いのだ。銀八は涙とともにぐっと言葉を飲み込む。
「先生、なにをおねがいしたんですか?」
「……無事、教師を続けられますように、って……」
本気で願った。
「ぼくは、十年ごも先生といっしょにおまいりできますようにっておねがいしましたよ」
「え?」
「ほんとうですよ」

顔を下に向ければ、桂くんは早速携帯に取り付けたピンクのお守りを得意げに見せてくる。
「おまもりって、一年つけたらおたきあげっていうのしなきゃいけないんですよね？」
「よく知ってるねえ」
「来年もいっしょにきましょうね。そして、このお守りをおたきあげしたら、また同じのをかってください。やくそくですよ」
「……ヅラくんが忘れてなかったらね」
「わすれません。ぼくはしゅうねんぶかいのです」
「ヅラくん、それ使い方間違ってる」

■冬休みのお話

もうすぐ始業式が始まる時刻だった。銀八は学校に電話を掛け、今日は休む旨を伝える。事情は全て説明しなくとも通じているようだった。

携帯を切り、一瞬暗くなった画面に自分の険しい顔が映る。

駄目だ、こんな顔のままでは不安にさせてしまう。眉間を揉み解し、頬を引っ張って強張りを取る。深呼吸をして、気合を入れ、銀八は部屋に戻った。

「ヅラくん、お腹減ってない？」

足が届かないソファに小さく収まった桂くんが、ぱっと顔を上げた。

「……先生、学校へいかなくていいんですか？」

「行けるわけないでしょ。大丈夫、今日は授業ないし、さっき電話したから」

青いハートのストラップをつけた携帯を振ってみせた。安心させるつもりだったのだが、桂くんの顔はさらに悲しそうに歪む。

「だめです。ずる休みです。ぼくはだいじょうぶですから、先生は学校へいってください」

「ズル休みじゃないよ、ヅラくんを残していくわけには……」

「だいじょうぶです！　先生にごめいわくをかけたくないんです！」

悲鳴じみたその声には、すでに涙が混じっていた。銀八は強く唇をかむ。

昨日、冬休み最後の日。直行便で帰ってくる両親を出迎えに、銀八と桂くんは一緒に空港へやってきた。

普段、性別が分からなくなる瞬間はあっても、桂くんも男の子である。滑走路から次々飛び立つ飛行機に歓声を上げ、実に楽しそうだった。
「ヅラ子さんたち、なんて便で帰ってくるんだったっけ?」
「えっとですね。メールをもらいました。えっと、びーえる826びん、です」
「じゃあ、もうすぐだね。そろそろお迎えに行こうか」
「はいっ！　お母さんとお父さんのかおを見るのはひさしぶりです」
「二週間ぶりだもんねえ。うれしい?」
「うれしいです。あと、お父さんに先生をしょうかいできるのもうれしいです！」
「……それは、普通の意味での紹介なんだよね⁉」
桂くんの手を引いて窓際を離れようとした瞬間だった。
ピンポンパンポン。
間の抜けたチャイム。しかし、何故か不穏な空気をにじませたそれの後に、空港全体に緊急アナウンスが流れた。

ジャカルタ発成田直行便BL826便がハイジャックされました。

失神した桂くんの身体を抱え、グランドアテンダントに自分は搭乗者の子供の担任教師だと詰め寄って内情を聞きだした。騒ぎを聞きつけたマスコミから桂くんを隠し通すため、ファーストクラス用控え室を一室、使用許可を取り付けた。
真っ青になって震える子供の姿を目の当たりにしたためか、空港職員たちはとても協力的で、桂

くんの周りにはカメラ一台レポーター一人いなかった。外部からの情報は、逐一銀八が聞きに行っている。一々携帯が鳴ったら、その度に桂くんが怯えてしまう。

飛行機はまだ空港上空を旋回している。進路をカンボジアに変えろというハイジャック犯の要求は変わらない。燃料は大目に積んでいたのだがもう残り少なくなっており、乗客の人命のために空中給油の交渉に入ったところだ。

一晩たってもなにもよくなっていない。深夜に目を覚ました桂くんは、それから一睡もせず何も食べず、ただじっとソファに座っている。

どこか有名なデザイナーの作品なのだろう。シックなデザインのＶＩＰ用高級ソファだが、今の桂くんにとっては、教室の冷たく硬い椅子のほうがよっぽど居心地がいいはずだった。

銀八も隣に腰を下ろす。沈み込む感触がまるで地の底まで落ちていくように思えて、一瞬ぞっとした。

「迷惑なんて思ってないよ。先生もヅラ子さんたちが心配だよ」

「いいんです。お母さんとお父さんは、先生にはかんけいないことですから。ぼくはだいじょうぶですから」

ずっとこの調子だった。早く帰ってくれ、一人で大丈夫だからと、泣くことすらしなかった。

怖いだろう、不安だろう。いくらでも泣いて縋ってほしかった。子供はそうするべきで、大人はそれを受け止めるべきなのだ。

嫌われたくないのだ。こんな大きな事件に銀八を巻き込んで、両親のことで心配をかけて、銀八に『面倒くさい』と思われたくないのだ。

（なんで、子供ってこんな変なところで気を使うかね……）

ほかに対しては我侭放題なくせに。迷惑ならもう山ほど掛けられている。年末年始、ずっと家に居座られて、どれだけ大変だったと思っているんだ。普通だったら、怒って両親にすぐ日本に帰ってこいと怒鳴っているところだろう。

でも、銀八はそうしようとは思わなかった。いくら桂くんが変な行動に出ても、迷惑だなんて思わなかった。嫌いになんかならなかった。

一緒にいて楽しいと思った。笑った顔が可愛くて大好きだと思った。口に出して言ったことはないけれど。教師が一人の生徒に、こんな特別な感情を抱くのはいけないことだから。全員を均等に愛してやらねばいけないから。

冬休みの間、銀八の愛情を独占しようとして、少しでも抜け駆けしようとして、精一杯気を引いてきた桂くんは、今、銀八から距離をとろうとしている。みんなの先生に戻ってほしいと言っている。

誰が言うことを聞いてやるもんか。

大人が全員、自分の思い通りになると思ったら大間違いだ。

二週間、毎日二十四時間一緒にいて、ただの先生でなんかいられるもんか。

もう分かったんだ。桂くんのマセた行動はただの甘え下手だ。

お母さんは桂くんとお父さんを愛している。お父さんは桂くんとお母さんを愛している。

でも、お母さんとお父さんは抱き合って愛し合っているのに、桂くんには抱き合う相手がいない。

桂くんは抱き合って愛してくれる人がほしかった。お父さんがお母さんを愛するように、愛してくれる人がほしかった。それを叶えてくれそうな大人が、銀八しかいなかった。

もう先生分かっちゃったもんね。だから、どうすればいいかなんてお見通しだ。

教師舐めんなよ。先生は可愛い生徒のためだったら何でも出来るんだぜ。
銀八はソファから降り、床に膝をつく。桂くんより目線を下げ、その顔を覗き込む。
「桂くん。桂小太郎くん」
「……え？」
出席取るときだって滅多にちゃんと呼ばない、桂くんの名前。
「先生は、二週間、君の家族でした。ずっと一緒ですごく楽しかった。だから、これからもずっと桂くんの家族でいたい。だから、桂くんのお母さんとお父さんも先生の家族だ。関係なくなんてない」
「先生、そういうのはいいんです。ぼく、ほんとうに……」
「桂くん」
小さな手を取る。姫君に傅く騎士のように、恭しく小さな手を掲げた。
「十年後まで先生の家族でいてください。二十年後も、三十年後も、ずっと俺の家族でいてください。先生の、坂田銀八のお嫁さんになってください」
大きな目がこぼれそうなくらい見開かれて、何がなんだかわかんないって顔をして。可愛いなあ、もう。
「あの、ぼく、男の子なんですけど……」
「知ってる」
「まだ、九才なんですけど……」
「どうせ大人になっても法的には結婚できないんだから、今結婚しても同じじゃね？」
「あ、赤ちゃんとか、産めないんですけど……」

「先生、学校で子育てするから、自分の赤ちゃんはいなくても平気だなあ」
「こんな時に、じょうだんはやめてください！」
「愛してるよ、小太郎」
ちゅ、と、掲げた手の甲に小さく唇を落とす。
「冗談でこんなこと言わない。愛してる。十年後も二十年後も三十年後も、ずっと愛してる。小太郎のためなら死ねる」
小鹿みたいな、つぶらな黒々とした瞳。泉のように沸きあがる涙が愛しくて、唇を寄せて吸い上げた。
「あの……ぼく、もしかしたら、十年ごとかすっごくからだ大きくなって……ぜんぜんかわいくないかもしれないんですけど……」
「それでもいいよ。小太郎は可愛いよ」
「ぼく、まだこどもだから……中学校とかで女の子とかすきになって……そしたら、先生がきらいになっちゃうかも……」
「それでもいい。俺は小太郎の全部が好きだから、そういうのも受け入れるから」
「……せんせぇ……」
声を出そうにも出せないらしい。身体を引きつらせてしゃくり声を上げる桂くんをそっと抱き締めた。
「キスしていい？」
「……はいっ！」
あー、やーらかい。ちっちゃい。そっと舌を差し入れようとしたら、先っぽが入るだけで精一杯

だった。花びらのように薄い桂くんの舌を、銀八の肉厚の舌がつつけばひくひくと身体を震わせた。
そのまま、ゆっくりとソファに押し倒す。身体をぴったりと寄り添わせ、体温を分け合う。桂くんの子供の体温より、自分の体温のほうがよっぽど熱くなっていることがおかしかった。
「せんせ……あの……」
するりとセーターの下に潜りこんできた銀八の手に、桂くんが戸惑いの声を上げる。
「だいじょぶ……入れないから」
淫行になっちゃうからね。芥子粒のような乳首を指の腹で潰す。あ、と、微かな声を上げる桂くんの頬が、涙とは別の熱さを帯びてきた。
「最後まで行くのは十年後な」
「はい……」
銀八の腹に触れた桂くんの股間が一人前に固くなっているのが、なんだかとても愛しかった。

数時間後、ヅラ子さんがハイジャック犯に殴られたのを機に犯人グループ全員を木刀一本で叩きのめして、無事地上に生還してきたお父さんに、銀八が3／4殺しにされ、三学期の殆どをベッドの上で過ごしたのは、余談である。

■成人の日の話

「先生、起きてくださいよ。いつまで寝てるんですか」
「……んあー？」
枕もとの携帯をまさぐる。小太郎がこんな不機嫌な声を出すということは七時過ぎだろうか。そろそろ出勤の支度をしないと……
「おまっ……！　もう九時じゃん！　遅刻してるじゃねーか、何で起こさないの⁉」
「……今日は祝日です。成人の日です」
ほんとうにこのマダオは。呆れ顔で枕元に正座している小太郎の仏頂面も見慣れたものである。
「……ハッピーマンデーって、社会に混乱しかもたらさないと思わない？」
「混乱しているのは先生みたいな社会不適合者だけです」
「可愛くない！　この子可愛くない！」
「もう可愛い子供じゃありませんからね。僕、もう出かけちゃうんで早く朝ごはん食べてください」
そういって立ち上がった小太郎は、ぱりっとしたスーツに身を包んでいた。
「……ああ、そうか。今日、成人式か」
「そうですよ。今日から社会の一員ですよ。犯罪犯したら新聞に名前出るんですよ。例えば九歳の生徒に手を出したりとか」
「だから、あれはお前から手を出してきたんだって何度言えば分かるの⁉　俺は被害者だよ⁉」
「覚えてないなあ、なにせ十年以上前のことですから」
しれっと嘯く顔は、十年前の柔らかな可愛らしさの面影を残しつつ、怜悧なさえた美貌に変化を

遂げていた。
まー、見事な進化をしちゃって。日を追うごとに美しくなる二十歳年下の若者の姿を、もう四十に片足突っ込んだ中年男はぼーっと眺める。ぴくっと、その美貌の青年の細い眉が跳ねる。
「何見てるんですか、いやらしい」
「夕べのいやらしい小太郎君を思い出してました」
「……この、エロ親父ッ‼」
一気に顔を真っ赤に染めた小太郎が手に持っていたドテラを投げつけてくる。
禁欲十年(といっても、寸止めペッティングは毎日のようにしていたが)、晴れて本番解禁となった一年前から、二人は二日と空けずヤリまくりである。
もう三十も後半となった銀八としては体力的にはきついのだが、十年間焦らされまくってトロットロに開発され、ようやく花開いた小太郎のエロ進化っぷりには抗えない。一回ごとって話じゃないよ、一発ごと、一突きごとに進化してるからね、この子。薄皮一枚の下はグッチョグチョだからね。人ってこんなにエロい生き物なんだぁって、生命の神秘を感じるレベルだからね。
もそもそとドテラを着込み、リビングに這い出てコタツの上に用意されたトーストを口に運ぶ。壁際では、姿見の前で小太郎がネクタイを締めなおしていた。どうにもうまくいかないらしい。
「ちょっと貸してみ」
食べかすを払い、小太郎の前に立つ。身長もすっかりと伸びてもう銀八と対して変わらない。それでも細いところは相変わらずで、服のサイズは一回り違うのが面白い。
変な形で固まっていた結び目を解き、手早く結びなおす。
「……上手いですね、先生」

「とーぜんです。先生はねー、君が生まれた頃からネクタイ結んでるんだよー」
細い仕立てのスーツに合わせ、ネクタイの結び目も小さめに仕上げる。
「はい、出来た。今日も可愛いね、小太郎くん」
ぽんと肩を叩いて日課の言葉を掛けると、ぱちくりと小鹿のような瞳が瞬きした。
「今日の僕も可愛いですか？」
「超可愛い」
「昨日よりも可愛いですか？」
「ぐっと可愛くなったね」
「明日も可愛いですか？」
「明日も、十年後も二十年後も三十年後も、ずーっと可愛いよ」
「僕も、昨日より先生が好きで、明日も、十年後も二十年後も三十年後も、ずーっと好きですよ」
唇を合わせる。ジャムの味がすると笑う小太郎のほっぺに、もう一発。
「じゃ、夜は同窓会ですから。遅れないでくださいね」
「はいはーい」
ピカピカの革靴を履いて、小太郎が玄関から出て行く。
さて、教え子たちにどう説明したものか。
当時の問題児であった桂小太郎君は、今、先生のお嫁さんとして一緒に暮らしています。
「……とりあえず、美容院でも行くかぁ」
すっかり老け込んだ自分を姿見の中に見つけて、銀八はにやりと笑ってみた。

終